愛国心と自由に考えるは相性が悪いのか？
―現代史 B の実践から―

高江洲　昌　哉

1：はじめに

2000 年代は，東アジアで歴史認識をめぐる対立が喧しくなった時期であるが，筆者は 2010 年度から現代史 B を担当するようになった。当初はそのズレを説明するため，アジア・太平洋戦争をめぐる未決の問題を教えることに専念していたが，次第に歴史の考え方／向き合い方を再考する授業をおこなうようになってきた。扱う内容は変化したとはいえ，一貫していることは，「正しい歴史」を教えるというよりも，「多様な歴史像を共有する」授業を試みてきたことである。そうしたなか，新型コロナ下で，個々の学生の授業態度が教室よりもつかみにくいオンラインで授業をおこなうことになった。2020 年度は初のオンライン授業の為，いくつかのアクシデントに見舞われながらもどうにか終えたが，振り返れば，筆者のオンライン授業は，板書が無くなっただけで，これまでと同じように毎回の授業テーマに沿ったレジュメと資料を利用し，数回授業内課題を課す内容であった。本稿はオンライン授業時の実践報告であるが，オンラインで出来る様々な技術を使いこなし，歴史認識をめぐる授業でこれだけの学習成果があがったと，オンライン授業の効果を報告する内容ではない。対面授業だろうがオンライン授業だろうが変わらない，資料を読んで自己の思考を深めるという授業実践の一例を報告するものである。

本稿は，表題にある「愛国心と自由に考える」課題を扱った 2020 年度の試験と，その回答の一部を利用した 2021 年度の授業・試験を利用し，学生の思考の一端を提示する。それではまず本論の出発点となる 2020 年度の試験問題を紹介する（試験は 2 つの問題からどれか 1 つを選択し，2000 字から 2500

字で論述するものであった)。

資料 1：2020 年度試験問題

問題 1，愛国心と歴史認識の自由の幅について，考えたことを述べてください。

問題 2，この授業では歴史認識における把握する側の感情の問題に注目して考えてきました（歴史の向き合い方の難しさ)。もう一方で「歴史と対話をして現状認識を豊かにする」という視点から歴史学習の可能性についても話してきました。「可能性としての “歴史認識”」というタイトルで，あなたはどのようにこの授業を理解したのか，考えたことを論述してください。

そして実施した試験の回答のなかに，以下のような回答があった（資料 2－A，2－B，授業では全文を使ったが，ここでは紙幅の関係もあり一部省略した，蔑視的な表現もあるがそのままにしている)。

資料 2，2020 年度の試験回答より

資料 2－A

この現代史Ｂという授業で，自分の歴史認識が正当化されていて嬉しく思った。今までの自分の考えというのは，周りの人たちと齟齬があることもあった。しかし，私の歴史認識というものには「愛国心」という前提がある。この「愛国心」を軸に，日本がかつて行っていた歴史を見てきた。日本を肯定的に捉えた一方的な情報だけを選択するのではなく，多面的な情報を客観視して見てきた。虚偽の情報を，虚偽の情報と見破ることができなければ真実を知ることは難しいとう。授業でも取り上げられた，日本と朝鮮の関係もその一つである。…略…（サッカーから韓国に興味を持ったことを述べて，以上は引用者による要約）そこで韓国とはどんな国なんやと興味を持ったのがきっかけである。いろいろな情報を吟味してきた結

果，日本がかつて朝鮮に行っていたことは「植民地」ではなく「併合」であるということだ。これは日本の真実の歴史である。しかし，いろいろな情報を見ていくうちに日本は，朝鮮を「植民地」とし残虐なことをしたと語っている記事もあった。明らかに違う情報であるのにも関わらず，日本人であると思われる人物が嘘の情報を撒き散らす意味がわからない。真実を知ることで日本が知れると思う。…略…

前述したように，日本には嘘の情報を撒き散らす「輩」がいる。日本と朝鮮の関係というのは，白人と黒人の関係ではないということは明らかである。それなのにも関わらず学のある学者や知識人などと呼ばれている人たちが，わざわざ「自分は歴史認識もできないバカである」と披露するのは，何故なのだろうか。滑稽に思える。一つの要因として「愛国心」が挙げられると思う。日本にどれだけ愛国心があるか。日本のことをどれだけ知ることができているか。しかし，一方的な情報だけでなく多面的な情報を見ることが重要である。真実を知ることができれば日本と朝鮮の関係に日本に非があると言うことはなくなるだろう。また日本から見た歴史認識ではなく，朝鮮から見た歴史認識というのも変えて頂かなければならない。どっちかといえば，朝鮮側の歴史認識を変えていくことがなければこの関係が改善されることはないと思っている。…略…政権末期に支持率のために，反日をアピールする国には歴史認識の改善を求めることは難しいことであるかもしれない。だが朝鮮には，精一杯の努力をしてもらい日本と朝鮮の歴史認識の改善をぜひ検討して頂きたいところである。

このように，愛国心と歴史認識には相関関係があると考えられる。日本を知るためには，日本をいかに愛しているか「愛国心」が重要であるということだ。「愛国心」が満たされていれば，歴史認識が誤ることがないとほぼ断言できる。しかし日本を肯定している問題だけを見るのではなく，正しい情報には目を通すことが大事なことである。

資料２－Ｂ

私は，本授業を受講するまで歴史ほど学ぶ意義のない教科など無いと正直考えてきた。それは中学校及び高校での，西暦何年にどういう原因でどんな事件が起こったかという既成事実のみを学び，クラス全員ペーパーテストに向けてただただそれらを暗記し，テストのときにたくさん暗記していた人が高得点をとることができるという歴史教育の在り方に疑問を抱いていたからだ。…略…渋々歴史を暗記していた高校２年生の時の私は，歴史の先生に思い切ってこの漠然とした疑問をぶつけた。その問いに先生は，過去の出来事を学ぶことで，今の出来事を測るためのものさしを構築でき，それから過去と同じ過ちを繰り返さないようにすることが未来を設計することができるという旨を伝えてくださった。その話を聞いた時の私は，確かに過去の過ちを繰り返さないという意義は分かるが，あくまでもそれは昔の話で，今は文化も技術力も国際関係も異なるっているため，過去と全く同じ状況になるわけがないし，綺麗事だなとしか思えなかった。

それから長い年月が経ち，今回この現代史Ｂを通じて再度歴史を向き合う機会が与えられた。本講義では，歴史の既成事実を紹介するとともに，立場や考え方の違いによるその既成事実に対する認識の違いあることを教えてくださった。私はこの話を聞き，痒い所に手が届いたような気持ちになった。戦争１つ考えても，学校教育での歴史であれば，ある出来事が引き金となり，戦争がはじまりまったという既成事実のみを学び，いかにも戦争の起こった原因が完全に掌握可能であるかの如く感じる。しかし，実際には戦争は数えきれないほどの影響因子があり，それらが複雑に絡み合い生じるのであって，原因など一概にいうことなどできないのである。…略…戦時中その国は自国が悪いという認識で戦争をしていただろうか。私は違うと思う。戦争している両国は，自分なりの正義に基づいて行動をしており，その正義の上で相反するからこそ戦争をしているはずなのである。つまり，１つの既成事実においても，立場によって考え方は異なるはずであり，まさに本講義を通じて学んだことと重なっている。

私が，歴史に対して長年抱いていた不信感は，己の歴史に対する認識が学校教育の歴史で止まっていたから生じていただのだと気づくことができたのである。…略…過去と全く同じ出来事は起こらなくても，考え方や気持ちレベルでは同じ状況を繰り返す可能性は大いにある。…略…つまり，過去の過ちを繰り返さないことができるのみではなく，これからの理想の将来から逆算した今を描くことができる。これこそまさに歴史を学ぶことの意義であ（る）…略…と感じた。

本講義の感想を一言で述べるならば，「衝撃」である。上記のように私の長年の疑問の答えが見つかっただけでなく，私の歴史に対する認識を根底から覆すようなきっかけとなったからだ。…略…

回答を提出した学生二人は，ともに授業内課題も欠かさず提出しており，「熱心」な受講者であった[1]。ただし，回答を読めばある程度了解できるように，その結論は真逆である。授業初回に，「同じ時間，同じ場所を共有しても同じ解釈をするわけではない。授業があったことは事実だが，良い授業であったと思う人もいるし，つまらない授業だったと思う人がいる。授業だけでなく，学校生活やサークル活動，飲み会でも似たようなことが起きる。こうした日常でも，経験による歴史像に違いが出てくるから，植民地支配や戦争だと，立ち位置の違いで歴史像にも違いが出てきても当然ではないか。それを無理に統一しようとするから対立が起きる。だから，この授業では『正しい 1 つの歴史がある』はひとまず脇に置いて，多様な歴史像を共有する方法を考える」といって授業をはじめてきた経緯[2]があるので，同じように私の授業を肯定的に評価しながら，学生自身が得た結論が真逆になった回答を読んだ時は，残念ではあるが，「わが意を得たり」の感を強くするものであった。試験回答を読みつつ，言うは易し行うは難しである「多様な歴史像を共有」するための課題を改めて確認できた。そのため。この回答を利用して，学生自身がこの歴史認識のズレについて，考察を深めてもらうことが出来るのではないかと考えて，2021 年度は資料 2 － A の回答を含む試験用資料を作成し，これら資料を読んで考え

る試験問題（資料 3）を作成した。

資料 3（2021 年度の試験問題）

問題 1：試験用資料 1 を読んで，「愛国心と歴史認識の幅」について，考えてみてください（「学生の視点から」という視座から考察してもよいです）。

この試験問題に取り組む前の第 11 回（12 月 7 日）の授業では，「歴史への向き合い方を考える」というテーマで授業をしていた。そこでは，歴史に向き合う態度に「誇り」の回復というものもあるが，歴史は「誇り」を付与するために存在するわけではない。「〈歴史を多角的に考察する〉と〈「誇り」を回復する〉という歴史への向き合い方に違いがあるのか」という問題提起をした。そして，試験問題に取り組むために参考になるような資料を数点紹介したあと，まとめの部分で「植民地主義や軍国主義を反省するためには，自由に考えることを尊重する社会の構築が必要であろうし，その前提として自分の「心」の中に「自分は正しい病」への免役機能があるかを確認してください」と述べた。

こうした話をしたあと，「愛国心と〈自由に考える〉は相性がいいのか悪いのか」を考えてくださいと課題4の説明をした。もっともこの時は話を続けて，本授業の性格から，この課題を東アジアで考える提案といえるが，日本は愛国心の暴走で第二次世界大戦の惨禍をもたらしたので，「日本から提案するな」と言われるかもしれないが，それとは逆に「日本だから提案できる」というように考えることもできると述べた。それは，自分のことを棚上げしない姿勢で提示する必要に気付いてほしいからであった。ちなみに，この注意喚起を引き受けて，「日本だから提案できる」という文脈で取り組む学生も複数人いた。

資料 4（第 11 回実施の）課題 4

まとめの部分で「愛国心と〈自由に考える〉は相性がいいのか悪いのか」

と問いかけましたが，みなさんはどのように考えますか，考えたことを述べてください。

3：課題 4 の回答から

課題4の回答を回収したあと，リプライの授業で，出発点になる回答として，「「愛国心と“自由に考える”は相性がいいのか悪いのか」という問いに対し，「私（回答Aを書いた学生のこと…引用者注記）の答えは，「国民次第」である」（**回答 A**）を紹介した。この回答 A を入り口にして，「愛国心と自由に考える」が補完関係になる意見として，「愛国心をもって〈自由に考える〉ことで自国の繁栄と防衛に対する選択肢が増えます。私は内容の良しあしに関わらず選択肢は多い方が良いと考えます。とそういった点から，私は愛国心と〈自由に考える〉こと自体は相性が良いと考えます。」（**回答 B**）を紹介し，次に「愛国心と自由に考える」が対立関係になる意見として，「自由に見ることができるということは，これまで自分の国が行ってきたことを善悪に限らず見ることになる。そのことによって愛国心の芽を摘む可能性も十分に考えられる。もし，自由に考える選択肢がなければ国によって都合のいい一面を見せられ続け，それを愛国心として根付くように強制させられることもあるかもしれない。」（**回答 C**）を紹介した。さらに，「（発言している人も…引用者注記）「自由に考えている」と信じているので裏に隠された「愛国心」が見えにくい」（**回答 D**）と，自由と思っている自身の思考の枠を再考するような意見もあった。

このように「自由」とは，無制限なものではなく，何らかの制限があることを意識する必要がある。つまり，「自由に考えている」と自分が思っていても，何かしらの影響を受けていることを自覚することが重要である。この点は，歴史認識に限った話ではなく，思考するときは常に頭に入れておいたほうがよいとも説明した。こうした自由観の見直しだけでなく，「気を付けるべきは愛国心を自国が絶対的に正しいということと勘違いしてはいけない。これが自分は正しい病の典型例である。互いの考え，価値観を尊重し，認め合う中での愛国心を持つことが必要である」と，愛国心を「飼いならす」ような回答（**回答 E**）

もあった。

さらに，愛国心の定義を考えるなかで，「「自由に考える」という理性的な行為を阻むものは自らが属する国家や民族を過剰に愛した結果生じる，排外主義的な考えであると思う。私はこの排外主義が愛国心ゆえのものであると一定の理解はするが，それ自体を愛国心であるとは思わない」（**回答 F**）のように，愛国心から排外主義を排除するような提言もあった。さらに「愛国心とは，単に国に対する忠誠心という意味で捉えるのではなく，人によって様々に国を愛するという意味で捉えるということだ」（**回答 G**）と，愛国心に付与さえるマイナス要素を取り除く意見もあった。

また，自分が生きている社会の自由度についても検討する意見もあった。例えば，「現代の日本では常識や普通とかけ離れた人と必要以上に距離を置いたり排除したりするような動きが強いように感じる。このまま常識やモラルやマナーなどに囚われすぎてしまうと自由に考える社会になることはできないと考える。」（**回答 H**）と，現在の自由に憂慮する意見もあったが，逆に「現在は愛国心と〈自由に考える〉という二者が上手に共存している時代であると思う。」（**回答 I**）と，現状を肯定的に評価する意見もあった。

このような順番で回答を紹介した後，果たして，現在日本の自由度に対し，どちらが正解かと明示することは難しいといえる。それならば，憂慮する方を支持する人は「より悪化しない方策」を考える必要があるし，良い方を支持する人は，憂慮の声にも耳を傾け，現状維持，またはより「良い」状況は何かを考える必要があろうと説明した。そして，おそらく最大公約数的な態度として，「これらのことから，愛国心と自由に考えることの相性をよくするということはあまり容易なことではないが，人々の学問の自由は尊重されなければならない」（**回答 J**）と，学問の自由への尊重という心がまえを身に着けることにたどりつく。ただし，回答Jが述べたように人びとが学問の自由を尊重するためには，個々の自由を認めることであり，この点は，最初の「国民次第」の前提になるであろう。「愛国心と自由に考える」を相性よくするには，その社会の自由度が大きな影響を与える。このように出発点とゴールが連結することを確

認して，この回の授業を終えた[3]。

4：試験回答から

試験回答である回答 L を紹介する前に，（留学生の）受講生が書いた課題 4 の回答（回答 K）を紹介した。

回答 K

日韓のサッカー競技があった次の日に大学の喫煙所で「韓国人は卑劣で，汚いから勝っただけで，実力で見るとしょうもない」という言葉を聞いたことがある。…略…

韓国の裁判所によって日韓貿易問題になったとき，私は日本の立場として戦後の条約の内容を見ながら，「この部分があるから，日本としては理解に苦しむことになると思うよ」と友達と話したことがある。すると返ってきた言葉は「親日派か？」「お前の故郷は日本だろう？」と嫌味を食らったことがある。要するに上の論じ方にすると，私は自由に勉強し，自由に考え，その考えを皆にも伝えて一緒に考えてみようとした瞬間に，排斥されたのである。

回答 K を紹介したのは，偶然の一致だが，試験回答である回答 L がサッカーに言及していたからである。偶然の一致で，ともにスポーツと愛国心から思考をはじめていた。

回答 L

このいきすぎた愛国心は時に人を傷つける。日本に在住している韓国人が SNS で韓国人に対する誹謗中傷を見たら，傷つくであろう。…略…不思議なことに，他の南米のチームや欧州のチームとの試合では，そのようなものは見受けられないのだ。私自身もなぜか日韓戦の時はどうしても負けたくない，負けてほしくないという気持ちがあるし，負けるとあまり気分が良くない。

ではなぜアジアの国（特に韓国や中国）に対するヘイトが多いのかを考

えると背景には間違いなく「歴史」が関係していると思う。…略…試験用資料１にも書いてあるように，愛国心は，国家によって意図的に作られ，今後も国家によって自由に操作されてしまうものである。上述の通り私も日韓戦には非常に気合が入ってしまうなど，自分も無意識のうちに，潜在的に対抗心のようなものが植え付けられている。私はこのレポートを書くにあたって数人の同級生に「サッカーとかで韓国とかに負けるのなんか嫌だよね」と聞いたら「わかる，なんか腹立つ」と口を揃えてこたえた。やはり自分が持っている感覚は間違ってないというか，潜在的にみんな持っているものなのかなと考えた。…略…歴史に対してしっかり向き合い，事実を隠さずに公表することが，このような対抗心のようなものをなくし，傷つく人も減ると考える。…略…これから学びを深める世代には是非愛国心を育む教育ではなく，事実を伝え，他国と上手に関係性を築ける人材を育成してほしい。

「正直」に書いているので，これら回答のなかには差別的な表現もいくつかある。授業では，これら回答を提示した後，自身の心の中にある「差別」の心情をなかったことにするのではなく，明示することで憎悪を煽るのではなく，どのように理性的に制御するかが大事であろうと述べ，次のような回答を紹介した。「より客観的な議論のできる雰囲気，健全な批判が自由に提示でき，それを包容する土壌をどう醸成していくかが鍵となる。」(**回答Ｍ**)。ある意味で，これら回答は建前を意識した「ぎこちない」対話から，欠点を認める「自然」な対話に向かうための準備作業といえる。授業でも，「できない模範解答を言うのではなく自分が出来そうな考え方をみつける」ことを勧めているので，そうした作業の一例としてこれら回答を紹介した。それにしても，はたしてこれほど過剰に歴史を意識する必要があるのだろうか，普通に考えると，歴史が現在の問題を規定しているように見えるが，それとは逆に，現在が歴史を政治問題化するような形で想起させていないか，こうした歴史認識のベクトルを再確認する必要があるとも述べた。

最後に，今回の試験のまとめになるような回答 N を紹介したい。

回答 N

私は日本という国に生まれたことをとてもよかったと思っている。…略…大きな大戦を経験しながらもそこから立ち直り，現在では世界でも有数の大国である日本を私は誇りに思う。…略…

今回，試験用資料 1 を読みこれを書いた人はとても祖国である日本が好きなのであろうという印象を強く持った。私も日本という祖国が好きであるからこの資料の筆者の意見は十分に理解できる。しかし，同時に違和感も覚えた。筆者は日本と朝鮮半島の歴史的関係性をよく調べ，知識を有していることは素晴らしいと思う。正しい情報や一方的な情報ではなく多面的な情報が重要であるという主張にも非常に共感する。しかし，この文章には主張されていたことがあまり反映されていないと感じた。

…略…個人単位での歴史認識の幅が生まれる要因の一つとして考えられるのが愛国心であると考える。個人の祖国に対する愛国心や執着が強ければ強いほど，歴史認識は自分の祖国の都合のいいように解釈が進むと考える。自分の祖国に不都合なことは隅に追いやり，いいことだけを大きく取り上げる。自分が正しい病であり他国の主張を聞き入れようとはしない。愛国心は国民としてある程度は持っておくべき必要なものであるとは考えるが，行き過ぎた愛国心は病気であると考える。「朝鮮には，精一杯の努力をしてもらい日本と朝鮮の歴史認識の改善をぜひ検討して頂きたいところである。」という資料 1 の文章には朝鮮のことを見下しているような印象を受けるだけではなく，自分は正しい，間違っているのは朝鮮だという一方的な主張を感じ取ることができる。国家間の歴史認識の違いは特に日本と韓国という場合，植民地，もしくは併合されたという一筋縄ではいかない歴史があり，主張が食い違うことはむしろ当たり前であると考える。そこをいかにしてお互いの主張を突き合せていき，解決していくかが切っても切れない隣国同士という関係性において必要なのではないか。筆者の

相手が歴史認識を改めろと言う一方的な主張は一番よくないと考える。…略…愛国心…略…は執着しすぎては自分の目が曇る原因になり得るし，無関心過ぎてもいけない。上手にかかわっていくことが必要であると考える。

まとめ

以上，本稿では「愛国心は自由に考えると相性がいいのか」という問題を通して，学生がどのように思考をしてきたのか，その一端を紹介してきた。

もちろん，「愛国心と自由に考えるは相性が悪い」という意見が多数存在したが，授業では，「相性が悪い」ものをどのように「相性が良い」ものにするか，そうした営為が読み取れるものを紹介してきた。総じて言えることは，「愛国心」から想起される否定的要素を，どのように再構築するか（捉え直すのか），こうした能動性の発動であった。もう少し付け加えると，自由をいかに担保するか，自由を尊重することが，思考停止や排他的な愛国心の弊害を回避する重要な要因であることに気付くことといえる。それは，授業でキーワードにした「自分が正しい病」に自身が「感染」していないかを自身で測定する力を身に着ける営為といえる。そのためには，適度な批判精神と相対化を養うことである。もっともこの「適度」が難しいことはいうまでもない。この問題は次の課題である。

---

[1] 資料２－Ａの学生が朝鮮・韓国と表現を分けた意図については不明である。また，個々の学生がどのように授業を聞き，理解したかは観察できないので，厳密にいえば「熱心」と評価できるかどうか不明である。もっとも，学生の授業態度の測定が難しいのは，大人数の対面授業でも同じである。

[2] 例えば，2020 年度の授業では以下のような回答があった。「現に今起こっている新型コロナウイルスの問題に対する捉え方も人によって大きく異なるのであろう。個人的に私は極力外出や外食を避けるように 12 月になろうとしている今ですらしているのだが，高校時代の同期から忘年会に誘われることも多くなってきた。いま忘年会を計画している人は 10 年後新型コロナウイルスについて「大した事はなかった」というだろうし，医療現場に今も従事している人や，飲食店を経営し苦境に立たされている人は

「とんでもない自然災害だった」というであろう。こういった今まさに起こっていることが歴史の認識における音声多重なのではないかと私は考えた。歴史というものは常に今作られているもので，私のこの感情や他者の感情が声になったり文字になったりして歴史は形成されていくのだなと思った。歴史とひとまとまりにするとそれはただ一つの事実のように感じられるが，自分のこの生きているひとつの時代がそのまま歴史になると言われればそれは一言で説明のつかない複雑なものではないかと感じられる。」

[3] あと，清涼剤のような回答もあったので，次のような回答を紹介した。

「実際に，私自身，韓国の家庭料理を取り扱った飲食店でアルバイトをしていますが，そこには，韓国出身の人を始め中国やその他多くの国々にルーツを持つような人々と普段接しています。そのような出身地などによる文化的背景が異なる人々でも，共通して言える事は日本が好きで日本にいるのだなと言うふうに感じることが多いです。そのため彼らが日本のことについて知ろうとする際は，私は出来る限り日本について教えています。それだけでなく，彼らの生まれ育った場所の文化や言語についても私から積極的に聞こうとしています。そのようにすると，彼らは熱心に自分の生まれ育った所について教えてくれます。そこで私を感じる事は，母国も日本もどちらも愛しているのならと私は感じています。…略…愛国心があることと，他の国を嫌悪する事はセットではないものであると私は思います。私はこの考え方を持って，より多くの人々と接していきたいなと感じています。」